

氏 名	佐 藤 知 久
学 位 の 種 類	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 249 号
学位授与の日付	平成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 文 化 ・ 地 域 環 境 学 専 攻
学位論文題目	HIVと他者性：合州国ブルックリンの事例から

論文調査委員 (主 査) 教授 菅 原 和 孝 教授 山 田 孝 子 助教授 田 中 雅 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ニューヨーク市ブルックリン地区においてHIV感染者（People living with HIV : PWH）を支援する非営利組織でのフィールドワークに基づいて、以下の二点を解明することを目的とする。第一に、HIVとともに生きるものの内実を、社会的な意味づけと個人的な経験という二つのレベルにわたって、明らかにする。第二に、社会がその内部に他者を構築するプロセスを分析することによって、「他者理解とはなにか」という設問に対して、新しい理論的な展望を与える。論文は、序章と結論を含め7つの章で構成される。序章において基本的な事項と概念を明らかにしたあと、第1章から第5章で、先行研究の検討、民族誌記述、それに基づく考察を展開する。最後に、「結論」において、以上を総合した理論的展望を提示する。

序章は、統計資料の分析によって、AIDSの病像とその疫学的概要を明らかにする。症例が公式確認された1981年からはじまり、HIVウイルスの発見を経て、1996年以降のプロテアーゼ阻害剤の実用化に至るまでを追跡したのちに、感染経路にみられる性差と、罹患率の民族間での差異をアメリカ合州国全体、ニューヨーク市、調査地であるブルックリンとのあいだで比較する。とくにブルックリンでは、1990年を境に、男性PWHの主要部分が白人男性から民族的マイノリティーに移行するのと平行して、感染経路の主軸も男性間の性的接触から薬物使用へと移行したことを指摘し、富と貧困のきわだった対照や劣悪な保健衛生環境が、この疾病の疫学的背景をなしていることを明らかにする。

第1章は、PWHが社会的に他者化されたプロセスを、マスメディア上の表象の分析によって明らかにする。AIDSを同性愛・乱交的な性・民族的マイノリティー・薬物使用といった「逸脱」的属性と結びつける趨勢が、PWHの社会的な他者化をまねき、それが感染予防対策に対して負の効果を及ぼしたことを論証する。さらに1980年代後半から勃興した、否定的イメージに対抗する表象を打ち立てる運動が、初期の感染者たちの死によって急速に停滞した過程を描き出す。これらの分析をふまえて、従来、「民族的他者」を主要な研究対象としてきた文化人類学に対して、HIV／AIDSが、「近傍の他者」について多くの本質的な問題を提起すると結論する。

第2章は、HIV感染についての人類的な先行研究をレビューし、3つの研究の流れを区別する。1987年前後から本格化した研究は、いわゆる「ハイリスク・グループ」の下位文化を民族誌的に解明することによって予防プログラムとの橋渡しをめざす、応用的な性格によって特徴づけられる。だが、文化構築主義の立場にたつ研究は、こうした疫学的カテゴリーの固定化を批判し、個人間の差異を「文化」概念に還元することが人種主義的な効力を発揮することを明らに出した。このジレンマを乗り越えようとする批判的医療人類学の流れは、HIV感染の土台にある資本主義社会の構造的抑圧を暴きだすことに分析を集中した。しかし、これらの研究はいずれも、病とともに生きる経験をめぐる考察が不足している点で不十分であることを指摘し、HIVとともに生きる日常的な実践そのものを了解することこそが肝要であると結論づける。

続く第3章から第5章までは、本論文の核心をなす部分であり、ブルックリンで1997年から1999年にかけて行われたフィールドワークに基づく考察を展開している。

第3章では、個々人の語りを詳細に分析することによって、HIV感染という現実に入びとがどう対処したのかを解き明かす。とくに、感染を告知された後のひきこもりや「底つき体験」を経てなんらかの覚醒を経験し、セルフヘルプ・グループに関与するに至った過程を、綿密に記述する。そこから、HIV感染を受容することが、自己コントロールの破綻という契機と密接に関連していることを浮かびあがらせる。

第4章は、申請者がスタッフとして身をおいた調査対象組織Aにおける、支援者（職員）と被支援者の相互行為を、民族誌的に記述し、分析するものである。まず一対一で行なわれた支援の現場を記述し、その特性を明らかにする。つぎに支援者自身が、「支援する」という行為をどのように把握しているかを、かれらとの日常会話やインタビューで収集された言説を手がかりにして明らかにする。そこから、当事者による自助を促すことこそを、PWHに対してそうでない人びとが投げかけるべき関係のありかたとして優先するA組織の理念に対して疑義を提示し、第5章の分析へと接続する。

第5章は、A組織内でもたれる定例ミーティングにおけるPWHどうしの相互支援のプロセスを記述し、その意味を問いなおすものである。まず、セルフヘルプ・グループの定義、およびこれまでの「共同体」論が依拠してきた理論的な枠組みを再検討する。従来は、セルフヘルプ・グループの活動が、共有された困難についての新たな合意や対抗的な価値観を形成することを重視する傾向が支配的であった。だが、たとえそうした合意形成が不発に終わるとしても、HIVに感染したことの意味を仲間とともに問いなおし続ける作業のなかにこそ、多くの可能性が秘められているのである。本論では、このような可能性を「他者と在ることの共同性」と名づける。

「結論」は、「他者と在ることの共同性」という概念を精練し、この概念をより広範な理論的地平で明確化するという課題にあてられる。哲学、法哲学、文化人類学といった多様な領域で戦わされてきた、自己＝他者間のコミュニケーションに関する議論と、本論の発見とを突きあわせることによって、対抗的な意味の生成を絶対的な目標として掲げることのない、対等な会話の空間が開かれることこそが、一般的な意味での「他者理解」の基盤となりうるという展望を示す。そのような「他者理解」とは、ある他者のカテゴリーを文化的な共同性によって特徴づける、文化人類学の主流をなしてきた「他者理解」のありかたとは根本的に異なっていると結論する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、HIV感染という苦悩に満ちた経験を文化人類学的な研究の対象に据えた点で、きわめて野心的かつ独創的なものである。HIV感染は、現代社会における病と死について考えるうえで比類のない重要性をもっているにもかかわらず、わが国の文化人類学では、少数の先行研究を除けば、この問題は未踏の領域であった。とくに世界で初めてのAIDS流行地である米国において、みずから支援組織の一員として活動に携わることによって精密な民族誌記述を積み重ねたところに、本研究の随一の独創性がある。

本論文において評価すべき学術的価値は、以下の四点に要約できる。

第一に評価される点は、本論文が、HIV感染とともに生きる人びと（PWH）と社会とのあいだに生じた断絶を乗り越えるために文化人類学は何をできるのか、というすぐれて実践的な問いを提起し、しかも、この問いをめぐる展開される思考が明晰な論理に貫かれていることである。とくに、アメリカの文化人類学者によるAIDS/HIV問題への取り組みを跡づける第2章は、この研究領域が内包する矛盾を精確に把握しており、高い理論的価値をもつ。1980年代半ばから進展した、この分野にかかわる文化人類学的研究は、男性間の性的接触、薬物使用、民族的マイノリティといった、社会からの逸脱性によって特徴づけられる「ハイリスク・グループ」の下位文化を解明することによって疫学的な予防プログラムに寄与するという応用人類学的な使命をおびていた。しかし、研究のこうした方向性は、感染者を固定的なカテゴリーに閉じこめるというジレンマをおびていた。いっぽう批判的医療人類学は、感染者たちを抑圧的な構造の犠牲者として位置づけることによって、病とともに生きる経験を内在的に了解することから遠ざかってしまった。PWHの日常的実践に考察の焦点をしばらくこむ本論文の主題設定は、先行研究の限界を突破するものであり、説得力に富んでいる。

第二に特筆すべき点として、個人に焦点をあててHIV感染という極限的な経験へと肉薄する民族誌記述の質の高さがあげられる。とくに第3章においては、HIV感染に追いやられた人びとの苦境、感染を知ったときの衝撃、社会的な孤立、そして覚醒と回復へのプロセスを鮮明に描きだし、近年とみに盛んになっているライフストーリー研究のひとつの到達点を

示している。

第三に、とくに第4章の分析に体现されているように、支援組織の職員たちとPWHとの相互行為の様態を明らかにすることによって、近年の文化人類学のなかで新しい領域として注目されているセルフヘルプ・グループ研究の発展に大きく貢献したことを評価しなければならない。職員たちとの密接な協同作業から収集された言説の分析は当事者の自己統御を奨励するという支援の基本原則を照射し、さらにこの理念と当事者自身の経験世界とのあいだに生じる齟齬と緊張関係をえぐり出している。

第四に、本論文の最大の価値は、HIV感染者への支援、および感染者たち自身の相互支援という特異な題材を用いながら、「他者を理解することはいかにして可能か」という、文化人類学の根幹に関わる問いに真正面から取り組み、独自の解答を提示している点にある。この設問は、PWHが社会的な他者へと疎外された過程を表象分析を通じて明らかにした第1章において明示的に導入され、結論に至るまで本論文のもっとも太い理論的骨格をなしている。

とくに定例ミーティングにおけるPWHどうしの相互行為をつぶさに分析した第5章では、従来、社会学あるいは法哲学といった多様な分野で追究されてきた共同体論と対峙しながら、新しい共同性の概念を導き出している。それこそが、あくまでもHIV感染の苦悩という共通経験に根ざしながらも、対抗的な価値観や共通見解に収斂することのない、「他者と在ることの共同性」である。さらに結論においては、ワイトゲンシュタインに由来するアスペクト転移をめぐる議論を援用しながら、HIV感染という経験の多面的な相に参与者たちが注意を向けることを可能にするような会話空間が開かれることの意味を明瞭に浮かびあがらせている。最後に、社会的な他者として疎外される人びとの内部においてさえ確定的な自己理解が共有されているわけではないこと、しかも、そのような他者たちが現にわれわれの近傍に存在することを感じつつ、上記に定式化されたような会話の空間に参入し続けることこそが、一般的な意味での他者理解の基盤となりうることを論証している。これらの議論が一貫して深い思弁の力に貫かれていることは、本論文においてもっとも高く評価される点である。

今後、本研究でさらなる探究が期待される点は、以下の諸点である。第一に、本論文は言説の分析を主軸にしているが、抗レトロウイルス薬の大量服用の副作用をはじめとする身体経験をも視野に入れて、日常的な実践の多様な層を把握することによって、さらなる民族誌的な展開をはかることができるだろう。第二に、セルフヘルプ・グループの活動が本論で明らかにしたような共同性の確立に失敗するような場合も分析の射程に収めることによって、本論文の理論的な主張はいっそうの普遍性を獲得するだろう。第三に、プロテアーゼ阻害剤の服用が不可能な発展途上国においては、AIDSは今も、「死に至る病」にほかならない。アメリカ合州国から得られた本論の知見を、死に直面している発展途上国のPWHの実存感覚と比較することによって、本論文が提示した「他者と在る共同性」の概念は、よりいっそうの奥行きをそなえるであろう。最後に、考察の軸となっているワイトゲンシュタインおよびアレントの思索を、本論文とは異なった角度から再吟味することは、本研究の理論的土台をさらに鞏固にするものと期待できる。

本学位申請論文は、文化的な他者のみならず、社会の内部につくりだされる他者を理解することを目的の一つとしている文化・地域環境学専攻 文化人類学講座にふさわしい内容を備え、今後の発展も大いに期待される優秀な研究成果といえる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成15年12月12日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。